

平成 27 年 3 月 8 日放送

富山教区 上新川組 妙傳寺 四下順文

数年前のことになりますが、祖母が女学校時代の同級生と久しぶりに会うことになりました。

私の祖母は耳が遠い為、私が電話で相手のおばあちゃんと日程の段取りなどをしました。

当日になり、祖母と二人、約束の時間の 10 分前に待ち合わせ場所に着きました。とりあえず二人が合流するまではと思い、祖母と一緒にベンチで待っていましたが、約束の時間を過ぎても相手のおばあちゃんは現れません。

すると私の心の中に色々な思いが出てきました。待ち合わせの時間は確かだったのだろうか？場所に間違いはなかったのだろうか？自分の記憶をたどり、確かに時間も場所も間違いないと確認すると、今度は渋滞でもしているのかな、忘れ物でもしたのかな、と相手を心配する気持ちが出てきました。

しかし予定より 30 分も過ぎるころには、もしかしたら違う場所に行ったのかもしれない。「まさか忘れているということはないだろうな」と相手の方が間違えているのではないかと疑う気持ちに変わってきました。おばあちゃん同士携帯電話は持っていませんし、相手の家の電話番号も知らないで、ひたすら相手を信じて待っているしかありません。

「早く来てくれ」「もう来るはずだ」それは自分の都合のいいように信じただけだったのかもしれない。結局予定の一時間後に相手は来られました。話を聞くと連絡の行き違いで、私は 10 時だと思っていたのが、相手は 11 時だと思っておられたのが原因でした。

この出来事があって昔テレビドラマで見た、恋人になりかけのカップルの男性の方が、クリスマスの日は何時間も雪の降る中で相手を待っているという場面を思い出しました。相手が本当に来るかどうか分からないのになぜ長い時間耐えられるのでしょうか？それは相手を信じている、信じたいからでしょう。

しかし待っている間に、いくら相手を信じたい気持ちがあったとしても、同時に疑いの気持ちも出てきます。自分が相手に会いたい気持ちが強ければ強いほど、「そんなはずはない」とその疑いの気持ちを打ち消そうとして、最後は「相手も私のことが好きで会いたいと思っているはずだ。」と自分で自分を信じ込ませようとします。結局誰かを信じるということは自分自身を信じるということになってくるのではないのでしょうか？

日頃の付き合いの中で、この人はこういう考えを持っている人だな、私にこういう感情を持っている人だな、というものの積み重ねによって私が勝手に作り上げた相手の気持ちを信じているわけですから、それはそうであって欲しいという自分の思いを信じていることになります。

そして私の期待する結果が得られなかった時は、そんな人だと思わなかった、裏切られたと相手を責めるのが常です。考えてみますと、とても自分勝手なように思います。

私に無条件でどんなことがあっても間違いなく信じるということはできるのでしょうか？

「これだけ信じたのだからこれだけの結果があるはずだ」という思いや、信じていた人に何度も裏切られますと、疑いの心がフツフツと心に起こってきます。信じる心と同じ量の疑う心を持っているのが私の本当の姿であります。そんな私ですから「そのままわれにまかせよ」という阿弥陀さまの願いをなかなか「はい、わかりました」と受け入れていくことができません。

「阿弥陀さまって本当にいるの？」「お浄土ってどこにあるの？」「死んだらどうなるの？」と疑いの連鎖をくりかえし、また「私は本当に阿弥陀さまを信じているのだろうか？」と自分の心の中を見よう見ようとし、自分の心の点検に終始している私があります。自分自身では阿弥陀さまの方を向いているつもりでも、実は自分の方しか向いていないのです。自分で自分の心を点検して納得いく答えを求めていく限り、阿弥陀さまを信じているというよりも、自分の心の納得具合を信じているに過ぎず、また信じようとしていることにしかならないでしょう。自分の心の中に間違いのない本物を見つけようとしても、いつまでたっても、そんなものはどこにも見つかりません。「間違いのない」

ものは、私の心の中にあるのではなく、阿弥陀さまの願いの中にこそあります。

「必ず自己中心のお前の心を開いて浄土へ連れて行く」その呼び声が「南無阿弥陀仏」の六字の名号です。

どんな私であろうとも、どんなに私がそっぽを向いていても、何度裏切られても、私のことを願ってくださっているのが阿弥陀さまです。阿弥陀さまはそんなお前ではだめだ、とおっしゃることはありません。どんな私でも無条件に引き受けてくださいます。

自己中心の心に囚われて、自分の都合通りに事が運ばなければ腹を立て、愚痴を言って生きているのが私ですけども、そんな自分の姿を気づかせてもらい、何が正しいのか、何が過ちかを知らせてもらって、他のいのちの痛みを共に痛み、他のいのちの悲しみを共に悲しめるような姿勢を持って生きていきたいものです。

もちろんそれが完成するのはお浄土に行ってからであります。み教えを私を中心に据えた生き方の中にこそ、自分のことで、精一杯で、他のいのちの悲しみに思いが至らなかった私自身に対しての目、また現実の社会の問題に対しての目が開かれていくのだと思います。

阿弥陀さまとの出遇いによって与えられるのは、きっと答えではなくて「問い」でありましょう。それは自らへの問いであり、社会に向けた問いだと思うのです。どこまでいっても自分中心の私である痛みと恥ずかしさをかかえながら、だからこそ少しずつ仏法にたしなめられ、いのちの正しい方向性を知らされ、そこに向かっていく。ことある事に自分に聞くのではなく、み教えに問い聞いて生きていきたいと思うのです。